

都心に位置する史跡公園の利活用状況に関する考察

A Examination of the Use of Historical Parks in the downtown of Osaka City

蒋海夫 土橋正彦

BY TYAN Haihu* Tsuchihashi Masahiko**

1. はじめに

1-1 研究の目的

近年、文化遺産を手がかりにしたまちづくりが盛んに行われるようになってきている。そうしたまちづくりの拠り所としては史跡、歴史的建造物、文化的景観などがある。上記のうち史跡については、現状変更手続きの厳格さなどのため、一般の利用者にとっては魅力に欠けるものが少なくない。

大阪城公園と難波宮跡公園は、隣りあって大阪市の都心に位置する史跡公園であり、利用者の多さや知名度といった面で大阪市を代表する公園となっている。

本研究は、これら2つの公園に着目して①整備の経緯の整理、②利活用パターンの把握、③利用者評価の定量的把握、を目的として実施しているものであり、本稿はその予備的な検討成果をとりまとめたものである。

1-2 研究の意義

わが国においては、都市の活性化、生活空間の質的な向上、観光客の誘致などの観点から文化遺産を手がかりにしたまちづくりへの取り組みが盛んであり、「文化的景観」の法定化、世界遺産登録、景観法の施行といった制度面での充実も著しい。

いっぽう、現代の東南アジア、特に中国やインドは急速な経済成長期にある。経済成長は国民生活を豊かにしたが、その反面様々な都市問題が発生している。なかでも経済的な評価が困難な「アメニティ」「歴史」「都市景観」と言った事柄はないがしろにされることが多い。現在の中国には経済優先の風潮が「一切為経済讓路（全てものはのために道を譲る）」と自国メディアに風刺される状況がある。都市開発のために、古風建築、歴史の横行と言った問題が生じ、都市景観に混乱が生じている。

日本は先進国だという。経済的な先進だけではなく、歴史景観保護や新たな街並み手段も発展途上国より進んでいる。日本の文化遺産保護と活用方策を学び、そ

keywords 文化遺産、史跡公園、意識調査

*学生員 大阪産業大学大学院人間環境学専攻

**正員 博士(工) 大阪産業大学人間環境学部
都市環境学科 教授 大東市中垣内3-1-1
tsuchi@due.osaka-sandai.ac.jp
phone072-875-3001 fax072-875-1259

の経験や手段を把握することは、これからの途上国における史跡保護にも有益なことでありと考える。

1-3 研究の方法

(1) 整備の経緯

文献調査によって整備の経緯等に関わる情報を収集・整理した。また現地調査を通じて収集した情報と対照した。

(2) 利活用パターンの把握

現地で来園者の行動を観察・写真記録し、今後の研究の基礎資料として整理した。

(3) 利用者評価の定量的把握

来園者を対象とした予備的・簡易なアンケート調査を実施し、来園要因や要素別の利用者評価データを得た。

2. 整備の経緯と現状

2-1 大阪城公園

(1) 概況

大阪城公園は大阪市の中心部に位置する面積106.7haの都市基幹公園である。この面積は市内の公園では鶴見緑地に次いで二番目に大きく、うち73haは特別史跡の指定を受けている。城跡としては主要部分の石垣および堀が全て現存し、大手門、千貫櫓など重要文化財13件がある。また徳川大坂城の天守台上に豊臣大坂城の意匠を模して昭和6年に再建された天守閣があり、観光のシンボルとなっている。この天守閣は再建後76年を経て、大坂城の天守閣としては豊臣時代の約35年（大坂夏の陣1615で焼失）、徳川時代の約40年（雷火1665で焼失）を超えて存続期間が最長で、平成9年に国の登録有形文化財に指定されている。西の丸庭園を除いて無料開放されているため来園者数を時系列的に把握できるデータはないが、統計のある天守閣に限っても年間およそ110万人前後の利用者を集めている。公園内および隣接地には大阪城ホール（年間160万人前後）、大阪歴史博物館（同50万人）、ピース大阪（同9万人）といった文化施設が集積しており、隣接する難波宮跡公園とも一体となった複合都市拠点を形成している。

(2) 公園の開設

大阪城公園の開設は、昭和6年（1931）で、昭和天皇御大典を奉祝する記念事業として天守閣が再建されたことを契機としている。天守閣復興事業は市民に熱狂

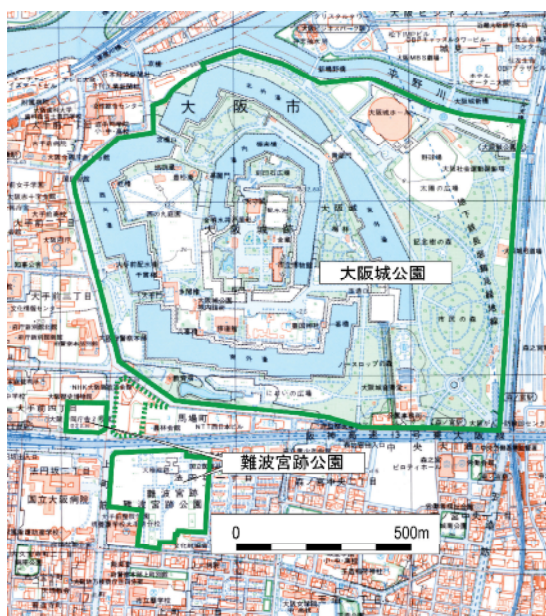


図2-1 大阪城公園と難波宮跡公園1)

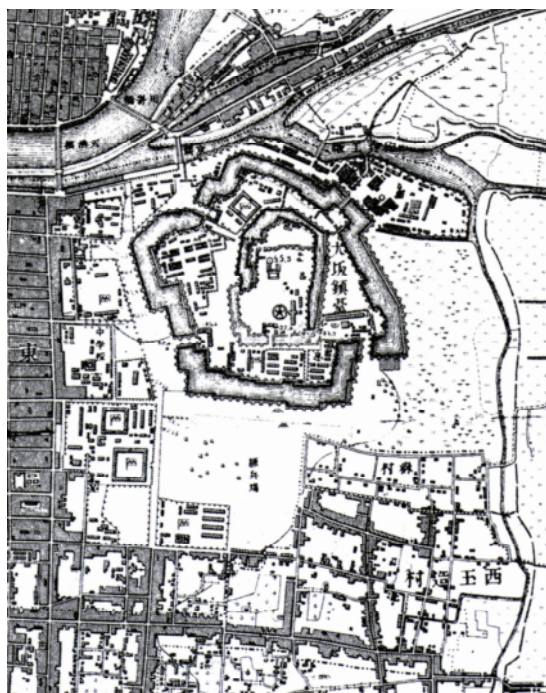


図2-2 明治中頃の大阪城周辺2)



写真2-1 大阪城公園

的に迎えられ、関一市長の提案から募金開始、竣工までわずか3年しか要していない。開設時の公園は、図2-3に示すように2.3haにすぎなかったが、明治以降、図2-2のように軍施設が配置されて市民の出入りが制限されていた城跡が初めて一般に公開されることになった。周辺を含む公園の構成は、復興天守閣、洋風の庭園、同じく洋風の第四師団司令部、和歌山城二の丸から明治18年（1884）に移築された紀州御殿と和風庭園、大手門から二の丸を経て本丸桜門までの動線、山里丸からなり、整備時に史跡としての正統性は意識されていない。

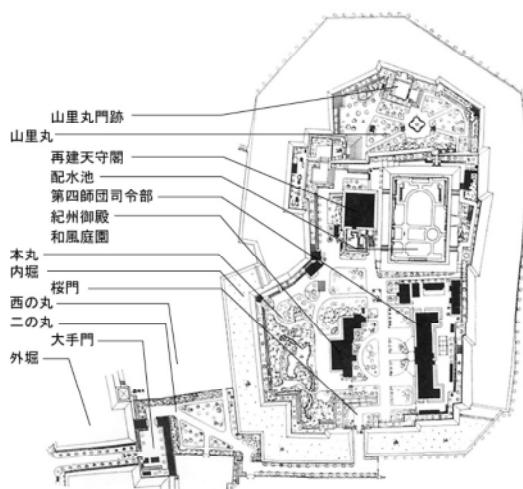


図2-3 開設時の大阪城公園3)

(3) 開設後の経緯

大阪城公園は太平洋戦争で大きな被害を受け、戦後昭和23年まで進駐軍に接収されたが、再整備を経て昭和24年に一般公開を再開した。以後「講和記念婦人子ども博覧会」（昭和27年）、「大阪万博」（昭和45年）、「大阪城博覧会」（築城400年、昭和58年）など、いずれもイベント開催を契機に拡張整備が行われた。また平成8年（1996）には埋め立てられていた東外堀も復元され現在に至っている。

2-2 難波宮跡公園

(1) 概況

難波宮跡公園は大阪城公園の南に隣接する計画面積約10ha（うち約8haが整備済み）の歴史公園である。第二次世界大戦までは主に軍関係施設が立地していたが、当時から古瓦が出土することが知られていた。戦後本格化した発掘調査の成果や数次にわたる保存運動が実り、昭和39年（1964）に大極殿跡を中心とする1.75haが国の史跡指定を受けることとなった。その後土地の公有化や史跡指定の拡大が進み、現在は公園周辺を含めた約12haが国の史跡となっている。

(2) 公園の開設

1970年に長期計画が立案され、史跡公園としての整

(3) 開設後の経緯

なお、昭和53年(1978)に大極殿跡の北直近に開通した阪神高速道路東大阪線は地下遺構の保護と景観保護を目的として、約500mの区間が平面構造とされた。



写真2-2 難波宮跡公園(大阪歴史博物館からの俯瞰)

3. 利活用パターン

3-1 大阪城公園

大阪城公園の利活用パターンを把握するため、図3-1の12ゾーンを設定し、2005年5月から11月、2006年11月、2007年2月、同4月に写真記録を行った。

（２）大阪城公園の利活用パターン

図3-1に、現地調査を通じて観察された公園利用者の主要な行動を、ゾーン別にまとめて示す。この図にみるように、概ね特別史跡の範囲内（ゾーン3～12）においては「城跡」の観光を中心とした利用状況が見られ、公園東部、南部のゾーン2、3では、通常の都市公園的な利用が主体となっていた。また、写真に示すように西の丸庭園および太陽の広場では大規模なイベントも頻繁に開催されている。なお、利用パターンにかかわらず、公園のほぼ全域で巨大な石垣や天守閣、古建築など、文化遺産としての大坂城跡が視野に入る状況があり、大阪城公園は、歴史性が活かされた大規模都市公園であることが確かめられた。

3-2 難波宮跡公園

(1) 調査方法

大阪城公園と同様に現地調査によって利活用の状況を観察した。調査時期は2005年8月から11月である。

（２）難波宮跡公園の活用パターン

難波宮跡公園では「四天王寺ワッソ」などのイベント開催時を除くと利用者が少なく、十分な観察成果が得られなかった。

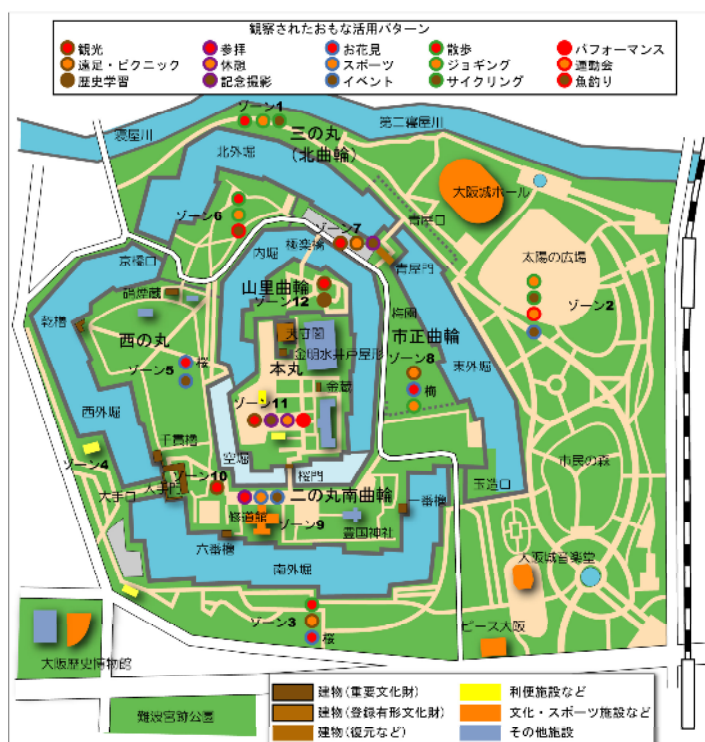


図3-1 観察された主な利活用パターン



写真3-1 観光 (大手門 Z10)



写真3-2 運動・散歩(市民の森 Z2)



写真3-3 イベント(太陽の広場 Z2)

4. 利用者評価

4-1 アンケートの概要

大阪城公園および難波宮跡公園利用者を対象として表4-1に示すアンケート調査を前後2回実施した。

表4-1 アンケートの概要

実施時期	2005年11月	2006年11月
実施対象人数	大阪城公園・・・41 難波宮跡公園・・・7	大阪城公園・・・117
方法	インタビュー	インタビュー
設問	1.居住地 2.利用交通手段 3.来園頻度 4.来園目的 5.公園の印象 (全体評価) 6.要素別満足度 みどり、園路、 休憩施設・手洗 案内・解説サイン 売店・食堂、 ゴミ箱 バリアフリー、 駐車場、 安全・防犯性	1.居住地 2.職業 3.利用交通手段 4.来園経験 5.来園目的 6.予定滞在時間 7.要素別満足度 お城らしさ、 休憩施設・手洗、 案内・解説サイン 移動しやすさ、 全体として 8.再訪希望 9.移動経路

4-2 利用者評価

難波宮跡公園では被験者数が十分確保できなかったため、以下では大阪城公園の利用者評価について述べる。

(1)来園目的

2回のアンケートとも観光目的が約3割、散歩が約3割、スポーツや写生などその他が約4割を占めた。日常的な来園が7割ということになる。

(2)要素別の満足度

おしなべて評価が高かったが、特に「お城らしさ」に不満を感じる回答者は1割に満たなかった。なお、利便施設(売店・食堂、駐車場、手洗)については不満を感じる人が2割程度見られた。

(3)全体としての満足度

要素別の満足度に関わらず全体としての満足度は非常に高く、不満を感じる割合は全体の1割に満たなかった。

また観光目的と散歩目的を比べると、散歩目的の場合の方が高く評価されている。

(4)再訪希望

8割以上の回答者が再訪を希望しており、全体としての満足度の高さを反映した結果が得られた。また、(3)と同様に目的による違いを見ると、日常的な利用者の評価の方が観光目的よりはるかに高く、大阪城公園と市民の距離の近さが示された。

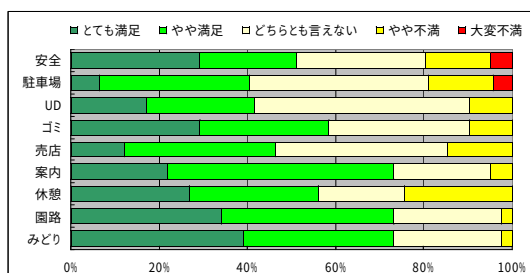


図4-1 要素別満足度 (2005)

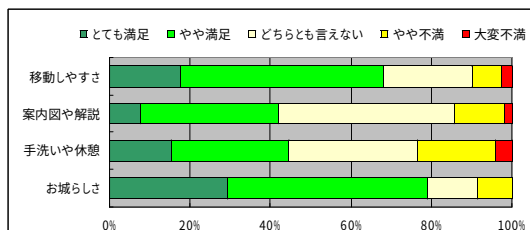


図4-2 要素別満足度 (2006)

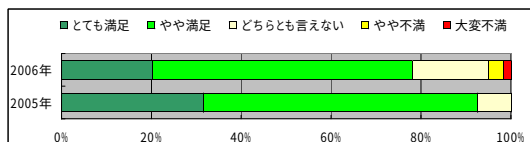


図4-3 全体としての満足度 (全目的)

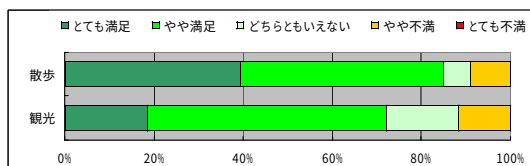


図4-4 全体としての満足度 (目的による違い)

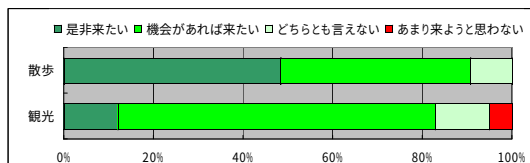


図4-5 再訪希望 (目的による違い)

5. おわりに

大阪城公園と難波宮跡公園を対象として、公園としての利用パターンおよび利用者評価を計測した。その結果、大阪城公園については、観光目的に加えて多彩な日常的公園利用が見られ、利用者の評価が極めて高いことが明らかとなった。今後は隣接する二つの公園を対照し、史跡公園としての正統性を保ちながらどう魅力を高められるのかについて、さらに研究を深めたい。

<出典>

- 1) 1万分の1地形図(国土地理院)を加工
- 2) 仮製図(陸軍陸地測量部)
- 3) 新修大阪市史